

---

# フェリとイタリの神隠し

Arthur

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フーリとイタリの神隠し

### 【Zコード】

Z0754Z

### 【作者名】

Arthur

### 【あらすじ】

そこにたどり着いたとき、俺は、何故ここにいるのかも、どうやってここに来たのかも、何も覚えていなかつた。幾ら記憶の引き出しを開けても、普通の日常の狭間から入つた別世界。そこで、俺はアイツと出会つたんだ・・・！

「コニコ動画「フーリとイタリの神隠し」へ小説化してみた」

## アイシヒの出合（前書き）

この作品は sm9603265（フヒリとイタリの神隠し）に心打たれ「そうだ。小説書こう。」と思い書いたものです。ところどころ文法変だつたり、話が掘みずらかつたりしている可能性が大いに考えられますので、あ。無理。という方は読まないことをお勧めします。だいたい許せる。というアマゾン川並みの心の広さの持ち主の方は読んで見るのもよいかもしません。やさしいアドバイス待つてます。

## 「アイシ」との出会い

ありえない場所があった。ありえないことが起つた。そこは、ふとした日常の片隅に存在する狭間の世界。そこは、この世の者が入つてはいけない世界

「ここは、一体どこなの・・・？」

俺は、広い草原に立つていた。そこには青い空が広がり、ところによく分からぬ形をした石像が無造作に散らばっている。

（俺・・確かに、日本の家に遊びに来たら日本とはぐれちゃつて、日本を探してたらトンネル見つけて、ここに・・）

記憶を辿つても、どういう道をたどってきたのか、何故あのトンネルの中に日本がいると思い入ろうと思ったのが分からぬ。こんな所に日本がいるはずは無いのに。幾ら思いだそうと思つても、トンネルに入るところからしか詳しく思い出せなかつた。何をしていいか分からぬ俺は、とりあえず草原を見渡した。

「ん・・？遠くに街・・かな？」

行つてみようか・・。そう思いながら俺は足を進めた。

「ふー。ついたー。あれ?でも誰もいない・・。まだ昼なのに・・。」

（とりあえず、もうちょっとあつちまで行つてみよう・・。）

しばらく歩いたが全く人の気配がしない。何やらおかしいとは思つたけれど帰る道が分からぬのだから前に進むしかないだろう。俺はしばらく歩を進めた。ある程度進んだところに大きな建物があつた。

（なんだ・・これ・・。）

煙突から煙が出ていることから中に入りることは分かつた。なにやら上のほうには旗があつて「眉」と書かれている。しばらくその

建物を見ていたらぼーっとしてしまっていたよひで。

ガタンゴトン・・・

俺はその音でぼーっとした世界から抜け出した。

「あ・・・電車の音?・・・」

そう思い建物までの道にかかる橋の下を覗き込んだ。すると突然後ろから聞きなれた声がした。

「ここで何をしている!!--」

(この声は・・・)

そう思い後ろを振り返ると少年が立っていた。何やらこわばつた顔をしている。

(あれ・・・?ドイツみたいだけど・・・ドイツじゃないのかな・・・。  
前髪垂らしてゐるし・・・。)

「帰れ!ここはお前のいるべき所じゃない!」

少年は言つた。だが、いきなり言われても何が何だかさっぱりだ。

「え・・?」

そう言つたのと同時にわざわざまで見ていた建物に明かりが灯された。

「つっ!もう明かりが・・・俺が時間を稼ぐ!その間に!早く!」

その少年はそう言いながら俺の背中を強く押した。

俺は、何が何だか分からなかつた。ただただ、走り続けた。俺が走ると平行に進むように街灯や店の灯りがついてゆく。それに何だか黒くて半透明のものが街を歩いている。それもたくさん。その物体にぶつかりそうになる。しかし、そんなこと考えている暇はない。しばらく走つた。そして、街を抜けた。

(トンネルまで戻らなくちゃ・・・!)

ジャバジャバ・・・!

「?!」

トンネルまで行こうと街に来る途中に上った階段を降りた。すると体の腰辺りまでが冷たい水に触れた。

(水！？)

俺は水から抜け出そうと降りてきた階段を上り、階段の上に立った。先ほどまで田指していたトンネルには灯りがともり、昼間は草原だつたはずのところには水があつて川のようになっていた。遊覧船もある様で川にぷかりぷかりと浮かんでいる。

(そんな・・・！こんなのが、おかしいよ・・・！)

「嘘だ！嘘だ！…嘘だ！…これは全部夢なんだ！」

俺はその場に座り込んで頭を抱え込んだ。

ギィイイイ、ガチャン。

しばらくそうしていると、遊覧船が俺のいる岸に寄ってきたようで、船と陸とをつなぐ橋をかけたのが見えた。その橋を渡つて中からさつき見た半透明の黒いものとは別の何かがやつてくる。

「うわああ！！！」

俺は急いで物陰に隠れた。わけのわからないことの連続でどうしたらよいのか分からなくなり、しばらくそこにしづもれていた。すると・・

ザツザツ・・・！

何かの足音がして、俺は化け物が来たのではないかと後ろを振り向いた。しかし、予想は外れていて、そこにはさつきの少年が立っていた。

「間に・・合わなかつたか・・・。」

それが、俺と少

年の出会いだつた

## アイシヒの出金二（後書き）

この作品が初投稿です。読みずらかつたりよく分からぬ箇所が山ほどあつたと思います。最後まで読んでくださつたその貴方！本当にありがとうございました！次話も書くつもりです。またまたですが、本当にありがとうございました！！

## アイツの名前（前書き）

トンネルをくぐった。そこには不思議の街が広がっていた。俺はそこでアイツと出会った。昔からよく知ってる、アイツにヘタリア二次創作 フェリとイタリの神隠し（ニコニコから）を小説化してみた。

## アイツの名前。

あさや  
麻屋店主、アーサーの部屋

「あーちゃーーー！」

麻屋最上階に位置する俺の部屋。その窓から、やけにあわてている妖精さんが入ってきた。

「ん・・？どうした？街の見回りは・・」

やつてきた妖精さんは担当制の街の見回り組の一員で、今日はその見回りの担当日だったからここにいるということは何か大変な事があつたか、妖精さんがさぼっているかどちらかだ。後者はないと思うが。と、いうことは・・

「！－ 何かあつたのか！？」

俺はかなり大きな声で妖精さんに聞いた。

「しょれがね・・ ！－」

妖精さんは早口に俺に説明した。

「なんだって！？異世界人がこの世界に入つて来たあああ？？ルートはどうした？！アイツだつて今日は見回り番のはずだろ！－！」

ルートが来てから今まで、アイツが見回り番の時は全くと言つていいほど悪いことはなかつたし、あつたとしてもアイツがすぐになんとかしていたようだから、妖精さんがあわてて俺のところに来るなんてことなかつた。

（しかも、異世界人が来たときには限つて・・－！ルートは何をしてるんだ ？！）

「君はわつきの・・－！ねえ、ijiijiせどじーへビヒヒヒヒ

に！？君は一体・・」

俺は少年にたくさん質問をしよつとした。しかし、俺の言葉は少年

の言葉に遮られた。

「今話している時間はない！今頃、アーサーが手下を使つてお前を探している！！早く立つんだ！！」

少年は俺の手を掴んだ。俺は少年の手を頼りに立とうとしたが、足に力が入らない。俺が立てなさそつな事を感じ取ると少年は呪文を唱え始めた。

「In Ihr em Test ment im namen de  
r wind und Wasser .よし、立て！」

少年は俺が答える前に走り出した。俺の足は意識していないのに勝手に動き、尋常ならざるスピードで街の路地裏を通り抜けていく。いつの間にやら大通りの方に出てきていて、その時にはもう歩いていた。そして最初に少年に会った建物へと向かっている。周りには遊覧船から降りてきたと思われる妖怪？たちや建物の中で働いていると思われる人たちがたくさんいた。しかし、俺のことが見えないようでみんな気にせず建物へ入つていつたり、自分の仕事を続けている。橋の前に差し掛かる時、少年が息を止めるよう俺に指示をしたので俺は息を止めた。もうすぐ渡りきるといつといろで・・・

「ルートヴィッヒさん！」

前に、何やらこちらに向かつてくる女の子がいる。

（かわいいんだけど！！息持たないから！！ちょっとどびいてえええ  
！！！）

しかし、俺は我慢も限界で息をしてしまった。やばっ！俺はそう思いまう一度息を止め直したが間に合はずもなく・・・。女の子は俺を見て一瞬時が止まつたかのように言葉を失つていた。ほんの少しの間が空き、

「ルートヴィッヒさん・・それ異世界人ですか・・?今、中でえらい騒ぎになつとりましたよ・・！」

女の子は目を見開いて少年に言った。

「つち！..ばれたか！イタリア！こっちだ！！」少年は建物を囲む塀に付いている小さなドアを開け、目にもとまらぬ速さで俺を招き

入れた。

扉をくぐると庭があつてそこにある木の陰に隠れさせられた。

「ここにいれば、しばらくの間見つからない。いいか、騒ぎが収まつたら後ろのくぐり戸から出て階段を下れ。しばらく行くとボイラー室がある。そこにいるヤツに働かせてもらえるよう頼むんだ断られても粘り強く頼め！帰りたいとか弱事をはくな！逃げるな！！分かったな！？」

そう言つてゐる間に、建物の中から「ルートヴィッヒ様」と少年を呼ぶ声が聞こえた。少年はその場を立ち去ると建物の方を見た。すると彼についての疑問が・・・

「ねえ！！俺、君に教えてほしいことが・・・君はどうして俺の名前を知ってるの！？君は俺について知ってるの！？」

少し安心したのだろうか。さつきまで気づかなかつた事が次々と頭に浮かんでくる。

「・・・・。俺はお前のことを見ながら知つてゐるのかもしれない。よく思い出せないのだが・・。ああ。俺の名はルートヴィッヒ。ルートと呼んでくれて構わない。用はもう済んだか？なら失礼する。俺は小さくうなずいた。それを確認すると彼は名前を呼んでいる人たちの所へと立ち去つた。

(ドイツじゃなかつた・・・ルートヴィッヒ・・・ルート・・・かあ・・・)

## アイシの名前（後書き）

前、同じ内容話（2話）を新たな作品として掲載してしまったので、2話をはじめに見てしまった方がいるかもしれません。本当に申し訳ありませんでした！…一話の方も見てやってくださいね。2話まで読んでください、すっごく感謝感謝の気持ちでいっぱいです！次話もよろしくお願いします！

## 麻屋で職探しー（前書き）

不思議の街にある麻屋。そこで俺はルートと出会った。そして、イタリア、麻屋で職探し運動開始！！！

俺はルートが建物に入った後しばらく木の影に隠れていた。もう建物の中は落ち着いているようで、これといって大きな声はしない。

「もう・・いいかな？」

俺は人に見つからぬよう静かに、ルートが言っていたくぐり戸の方へ向かった。

ギギギギ・・・

くぐり戸はかなり古じようで音を立てながら開いた。出たところにはルートが言っていた通り階段があった。想像していたのとはちょっと（かなり・・かな・・？）違っていたが。

（何これ！－階段なのは分かるけど、手すりないし！－落ちたら確実に死ぬよおお！ヴエー！－だれかあ！助けてええええ！－！－！）しばらく階段の前で白旗を振った。まあ、誰も助けになど来てくれないのだが。俺は勇気を振り絞り、壁にべつたりくつきながら階段をかなりゆっくり下った。3段ほど進んだところで・・・  
ぱきつ！－

怪しい音をたてて階段の木が折れた。その瞬間、俺は反射的に階段を悲鳴を上げて走り降りる。あんなに大きな悲鳴を出したのにばれなかつたのがすごいくらいだ。

「ヴエ・・ヴエエエエ！－怖かった！」

気を取り直して前へ進・・まなかつた。金属製のドアにぶつかつた。（もしかして・・・）

「こいつて・・さつきルートが言つてたボイラー室！－やつた着いたよ～やればできるじやん、俺」

あいいい・・・

扉を開けるとそこはまだ部屋ではなくて、短い通路があつた。前には人間らしきシルエットが2つ、影で映つている。何やら声も聞こ

えてきた。

「あいやああ！！腕の見せ所ある！！『ンスー』しつかり石炭運ぶよろし！！」

「ういーす！ 兄貴！ 石炭運びの起源は俺なんだぜ！」

「・・・・。 そつあるか。 分かつたからさつたと運ぶよろし。 変なポーズとつても誰も見てくれないあるよ。」

「冷たいですね」 兄貴

何やらすつごく馬鹿らしい？話をしている。 何だか入り込む隙がなかつたがここで引き下がるわけにもいかないので俺は通路を進み部屋に入り、 そこにいる人に声をかけた。

「あ・・あのお・・俺イタリアデス！！ パスタとピツツアが大好きなお茶目さんです！ ここで働かせて下さい！」

すると、 二人同時に振り向いて。

「あいやあ？ 何あるか？ お前は？ いきなり働かせてって・・・」

「そうなんだぜ！ 俺たちは一人で楽しくお仕事してるんだぜ！ お前の入る隙なんかねえんだぜ！ ね、 あーにき！」

「そうじゅねえある！！ いきなり働かせろって言われても・・・」

「こで働くなら、 まずはあへんの許可を取らねえと・・・」

しばらくの間沈黙が流れた。 しかし、 やけに声の大きな青年が奥のドアから入つてくるなり、 一人に話しかけるものだから一瞬にしてその場の重い空気が消える。

「王躍<sup>ワシヤオ</sup> 飯の時間やで、 あ、 ヨンスもな。」

「ついでみたいに言わないでほしいんだぜ！！」

石炭運びをしていた方の少年は青年が来て楽しそうだったが、 もう一人の薬らしきものを作っていた方の人はしばらく考え込むような顔をしていたがすぐに表情を変え、 思いついたように言った。

「アントニーヨー！ 「イツをあへんのどこまで連れてくよろし！！」

「「「え？？」」「」

## 麻屋で職探しー（後書き）

どうだったでしょうか？話をまとめる脳力がないのだと思います。全然話が進みませんね。まだ話がジブリの方と変わりません。。。まあ、頑張つて二コ二コ動画での感動を皆様にお届けできたらなーと思います。ぐつたぐつたですが次話の方もよろしくお願ひします！読んでくれて本当にありがとうございました！！

## 麻屋最上階（前書き）

親分たちに会つて、俺は、この世界にもいい人はいるのだと知った。親分に案内してもらつてたどり着いた麻屋最上階。これから、何が起ころるのだろう。俺には、予想すらできなかつた。

「え・・？ちょ・・。王、何言ひとるん？てが、コイツつて・・。  
？」

アントニー・ヨとこつ青年はすぐ「何言つてんだ？」みたいな顔をしている。

「コイツある。

そう言つて王躍ワシヤオといづ名の薬を作つていた人は俺のことを親指を使つて指差した。

「え・・人なんておつ・・・！」

アントニー・ヨは全く俺の存在に気づいていなかつたようで、指差された方向にいる俺を見て目を見開き、口をパクパクさせていく。

「ちょ・・！この人異世界人なん？！さつまで上で大騒ぎになつ

とたんやで！－！なんでここにおんねん！－！」

驚かないはずがない。正確にいうと人じやないけど。そんなことを思つていたら王さん、とてつもないことを言ひ出して。

「わたし我の孫ある。

王さんは平然と言つた。

（え・・！－！俺いつからこの人の孫になつたの！？）

ヨンスも驚いた顔をしているが、王さんに口を押さえられているようでモガムゴムガ！としか言えず、何を言つているか分からぬ。

（あ・・。もしかして、孫つてことにしてアントニー・ヨさんに、あへん？つて人の所まで連れて行つてもらえるよつたしてくれてるのかも！－！）

こういうときは空氣を読んでみます。

「孫おおおおおお？？？？？？王、そんなんいたんか？！なんで俺に教えてくれへんねん！もー、はようロヴィーノに紹介してやりたいわあ！アイツ、子分欲しがつてたんよー！」

アントニー・ヨさん、めっちゃ興奮しています。子分？何のことですか。

「まったく・・・。ロヴィーノに紹介する前にあへんに紹介する」と、  
忘れちゃダメあるよ！！」

王さん、話止めてくれてありがとう・・・。

「わーつてるわ！アーサーんとここまで連れてけばえんやろ・・・」  
アントーニョは少し頬を膨らませながら言つた。俺の方に顔を向けると勝手に自己紹介を始める。

「俺、アントーニョって名前なんやけど、みんなには親分って呼ばれてんや！お前も俺のことは親分つて呼んでえな！自分、名前なんていうん？」

「俺、イタリア。パスタとピザが大好きなお茶目やんです よろしくね～」

俺はアントーニョが悪い人ではないと分かり、元気に自己紹介した。（最初この世界に来た時は、何が何だか分からなくて、やつていけないんじやないかつて心配してたけど、みんないい人そうだし、なんとかやっていけるかも・・・）

俺は、少しうれしくなった。

「アントーニョ。そいつのことは任せたあるよ！..」

王さんは、グツーと親指を立てながらウインクをして俺のことを送り出してくれた。

アーサーと言う人の部屋に行く途中、親分は俺にこの事事を教えてくれた。

「ええか？ここではな、名前が変わんねん。アーサーがそれぞれに名前つけるんやけど・・何のために付けるんやろな？・・・まあ、ええか。でな、本当の名前を忘れると、帰り道が分からなくなるんやつて。名前、大事にしいや。親分はもう忘れてしもうたけど。その他にも、この世界に入った瞬間、異世界人は今までいた世界の事を忘れてしまうこととか、俺みたいに名前を覚えてるヤツもあんまりいないとか・・・。いろんなことを教えてくれた。そんな事を

話しながら俺たちはアーサーの部屋へと向かっていく。しかし2回目のエレベーターの乗り換える時、親分から異世界人の匂いがするとかなんとかで親分はバッシュと言う人に捕まってしまったが、親分はうまく俺の事をエレベーターに押し込んでくれたのでなんとかなった。親分は・・まあ、自力でなんとかするだろう・・。

エレベーターが麻屋最上階に着き、エレベーターの扉がゆっくり開く。最上階には他の階とは違う雰囲気が漂っていた。他の階よりうす暗く、静かで、何より怖い。エレベーターから少し歩いた所に大きなドアが現れた。直感で、この先にアーサーの部屋があるのだと分かる。俺は、そのドアの取っ手に手をかけた。

「・・・・・ 来たみたいだな。イタリア・ヴェネチアーノ・・・・・」

俺の机の上にある水晶玉には、扉の取っ手に手をかけるイタリアの姿が映っている。

(また・・一人、集まつたな・・・・)

俺はひとり、水晶玉を見ながら怪しい笑みを浮かべた。

## 麻屋最上階（後書き）

まだジブリとお話を変わりませんね・・・。本当にすみません。で  
きる限り皆さんに「」動画での感動を・・！・つて、前にも言  
つた気がします・・。もづボケが始まったのでしょうか・・。ま  
あ、がんばって次話も投稿したいと思います！

## アーサー・カーランド（前書き）

ついに俺は、麻屋最上階のアーサーの部屋にたどり着いた。そこにいたのは、少年でも、老人でもなかつた。そこにいたのはただ一人。眉毛の太い青年だつた。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」小説化してみた

## アーサー・カーランド

「ちょっと……バッシュユ……勘弁してえな……あれば、王さんの孫や！ならええやないか……」

アントニーは、両手を合わせてバッシュユに頬み込んでいた。

「アイツに孫などおるわけなかろう……嘘についてはいけないのである……！」

バッシュユはアントニーの話に聞く耳持たない。本来ならば無視している所だったが、お客様の迷惑にならないか心配だったので言い争いを止めて一人の所へと歩いた。

「全く……何をしているのですか？！」のお馬鹿さんが……こんなところで言い争つていてはお客様の迷惑になるでしょう……そんなことも分からぬのですか？！」

私は一人の事を叱りつけた。すると一人は私にまで言いかかるつてきた。

「なんであるか貴様は……父役だからと言つて威張らないでほしいのである……それに、貴様の声の方が吾輩たちの声より大きいのである……！」

「せうやで……ローテリヒ……それに、これは俺たち一人の問題なんや……手え出さんといて……！」

二人が私にまで乱暴な言葉を向けるものだからカチン……ときてしまいまして。

「なんなのでですかその口のきき方は……本当にあなたたちは……いつになつたら……・・・・・！」

その言い争いはしじめらしく続いたといつ……・・・。

エレベーターを降りてから少しの所にあるドアの先にもいくつかドアがあつた。が、今度のドアは今までのとは桁違いの大きさをしている。このすぐ先にアーサーが待ち構えているのだろうか。

（アーサーってどんな人なんだろう・・・。やっぱり・・・怖くて、つーんとして、人を寄せ付けない感じなのかな・・・？もしかして、おじいさん？　あ～あ、親分、アーサーのことはあまり教えてくれなかつたんだもんな～）

・ドッキン・・。ドッキン・・・。

俺の心臓がとても早く動いているのが分かる。これからアーサーに会いに行くのだから無理もないが。

（ここで働かせて下さい・・ここで働かせて下さい・・・）

俺は心の中でアーサーに会つた時の為の練習をしていた。俺は少しの間ドアの前で立つていたが、ついに扉を開ける決意をした。

「よし！ いくぞお～！！ ヴェ～！！！」

俺は、ドアに掛けた手を引いた。

ガチャン、ギィイ・・・

重々しい音を立て扉が開いた。その先には、さつきまでの様な通路がある光景はなかつた。俺の目の前には、暖炉と、事務机に背を向けて座つている一人の青年がいた。青年はこちらに背を向けて座っているので顔をよく見ることができなかつたが、彼から発せられている雰囲気などから、彼はまだ若く、年老いた老人ではないという事が分かつた。身長はそこそこあるようなので、少年ではない。

「やつと来たみたいだな・・・。イタリア・ヴェネチアーノ。」

青年は回転式の椅子に座つてゐるようで、ぐるりと回つてから俺の方を見てそう言つた。彼の顔をようやく見ることができた。彼は、金色に輝く頭髪、澄んだ緑色の瞳を持つていた。緑の瞳は金色の髪によく映える。そして、青を基調とした服を身にまとい海賊帽のようなものまでかぶつている。指にはたくさんの指輪をし、耳には大

きな円形型の金色イヤリング。彼を説明する言葉は今まで言つた他にもたくさんあるが、なにより目立つのは、眉毛である。ありえない太さをしていた。彼を漢字一文字で表すなら、「眉」である。

（あー！だから建物の旗、眉って書いてあつたんだ！！！）

今まで生きてきた中でこれほど納得したことはあつただろうか。しかし、そんなこと考へている場合ではない。今、するべきことは他にある。そりいえば・・・

「どうして・・俺の名前知つてるの・・？君がアーサーなんだよね・・？」

この人には初めて会つたわけだから、俺の名前を知つているはずがない。俺は疑問に思つた。

（ルートといい、アーサーといい、どうしてみんな俺の事を知つてるんだ？？）

2、3秒すると、青年はフツと笑つてから俺の質問に答えた。

「俺はお前の予想している通り、あさや麻屋店主のアーサー・カーランドだ。なんでお前のこと知つてたかつて・・そりやあ、お前のことを待つてたからに決まつてんだろ。あ、俺の為だからな！！勘違いすんなよ！――！」

アーサーさん・・。思つてたのと、なんか・・印象違います。

## アーサー・カーランド（後書き）

5話まで読んでくださった方がいるなんて・・・！！！感謝感謝です！皆様に楽しんでいただけたお話を田指して頑張ります！！暇な方は評価・感想の方をお願いいたします！ここまで読んでくださって本当にありがとうございました！

## 仕事見つかりました。 b yイタリア（前書き）

俺は、俺の望む世界を作るんだ。誰にも、邪魔はさせねえ。  
。「」動画「フリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

仕事見つかりました。

b yイタリア

「ここは神の国。お前には国ではなく、人間として働いてもらひつけ。」  
ここには神様がいるようだ。その前に、アーサーは俺のことをなんでも知っているのだろうか・・・？俺が国だとことまで知っているなんて。

（あれ・・てか俺、働かせて下さいって言つてないのに・・まあ、いつか 働かせてもらえるなら特に問題ないしーしづらべの間元の世界には帰れないのかなあ・・。）

アーサーは机に座つたまま何かを探している。

ガサゴソガサ・・。

「おーあつたあつた！」

アーサーはA5サイズ位の紙を持つて俺の所まで歩いてきた。そして、先程まで探していた紙と、万年筆を俺に手渡した。

「これ、お前の契約書な。ここに名前書け。」

アーサーは紙の右端を指差した。

（えっと・・名前書ける所は・・・。）

俺は暖炉の前の石の床で名前を書いた。「イタリア・ヴェネチア  
ノ」と・・・。

アーサーは俺が名前を書き終わると契約書を俺の手から取つて、しばらく俺の名前を眺めていた。寂しそうだけど嬉しそうな目で。アーサーは俺の名前の上に手をかざした。すると、俺の書いた名前がアーサーの手へと吸い込まれていく。吸い込まれた字と入れ替わるよつにして違う文字が手から出てきて紙に張り付いた。

「いいか、これからお前の名は「フェリシアーノ・ヴァルガス」だ。  
分かつたら返事しろ！」

「は、はい！」

突然言われたものだからびっくりしてしまった。

アーサーは俺を指差しながら自信満々の顔で言った。

「よおし！…そうと決まればお前は今から俺の部下だ！！分かつた  
な！？」

その後、天井からぶら下がっているロープを2回引いた。誰かを呼  
んでいるようだ。2分位すると、俺が入って来たのとは違うところ  
から少年が現れた。

「お呼びですか？アーサー様。」

俺は自分の目を疑つた。なぜかって、そこにルートがいたからだ。  
まさかここでルートが来るとは思つていなかつた。俺は驚きすぎて  
声を出すことができなかつた。アーサーは目を見開いて静止してい  
る俺（珍しいよね。開眼してる俺。なんで気づかなかつたんだ…。  
）を気にも止めず話し出す。

「今日から、コイツがここで働くことになつた。アントニー達ん  
どここまで連れてけ。ああ、ローテリヒ達にも紹介しておけよ！」

俺はルートに連れられ部屋を出て、エレベーターに乗つた。

ガチヤン。

ドアが閉まり、一人の姿が見えなくなつた。

「・・・また一人集まつたな・・・。」

俺は、一人が出ていった扉を見つめていた。すると・・・

「あ～ちや～どうちたの？あの人、異世界人なんだよねえ？ここで

働かせていいの？」

俺のズボンを掴み、俺を見上げながら小さなアルは言った。腕には白クマの人形を抱えている。

（いつの間に一人で歩けるようになったんだ！！？？）

「あるうううう！！！いい子にねんね出来てたなあー歩けるようにもなって！！さすがは俺の弟だ！！」

アルに頬ずりをしたら、嫌がられた・・・。うつ・・・（泣）。

「ねえ、いいの？」

アルはどうしても気になるようで、ズボンを引っ張つて俺に聞いてくる。アルに教えるつもりはなかったのだが・・・。

（仕方ないな・・・。）

「アイツは異世界人だけどいいんだ。アイツは人じやなくて国なんだ。だから・・・いいんだ。これで満足か？アル？」

俺はアルの目線に合わせて座つて本当のことを教えた。アルは疑問が解けて嬉しそうな顔をしている。

「うん！！わかつたんだぞ！教えてくれてありがとう！あ～ちゃー！――」

（この顔がかわいいんだよなあ～この時代のアルは・・・。）

絶対、俺の望む世界を作つてみせる。見てるよ、イギリス・・・。



## 仕事見つかりました。　b yイタリア（後書き）

今回の話はいつも以上にぐひゅぐひゅですね。わかりにくいう所があったら教えてください！頑張って直します！6話以降もよろしくお願いします！

## 結成、麻屋トリオ。（前書き）

「名前、大事にじいや。」俺は親分の言ったことを軽く流して  
いた。自分の名前なんて、忘れるわけないから  
□動画「フヨリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

一一一

## 結成、麻屋トリオ。

俺たちはエレベーターを3回乗り換え、階段を降りて広場のようなところに出た。するとそこには親分がいて、何やら心配そうな顔をしている。横にはそれをアホらしいといった感じに見ている少年がいた。頭からはくるんと一本、毛が生えている。

「あ・・！おやぶ・・」

俺は親分に近づこうとしたが、ルートに腕を引っ張られてしまった。

「こっちの方が先だ。アイツとはまた後で会えるから心配するな。ルートは俺の手を引いたまま、広場のような所の端の、机が置いてある所まで歩いていく。

「ん・・。ああ、ルートヴィッヒ。その方がフェリシアーノさんですね。先程アーサーから連絡がきました。アントニー卿の所で働くかせろと。」

机に、父役：ローデリヒと書いてある札が置いてある。その位置に座っているのだからこの人はローデリヒという名なのだろう。その隣にはさつき親分を捕まえていた人が座っている。札には、兄役：バッシュと書かれている。

「ああ。その前に皆に紹介した方がいいだろうか？」

ルートはローデリヒという人に首をかしげて聞いている。  
「いえ。別にいいでしょ。どうせアントニー卿が部屋で皆せんに教えて回るでしきうし。」

ローデリヒは親分の方を見ながら言った。

「そうだな。おい、アントニー卿！…こっち来い！…」

ルートは遠くにいる親分に聞こえるような大きな声で親分を呼んだ。すると、さつきまで心配そうな顔をしてオロオロしていた親分は、俺を見つけた瞬間パアッと明るい顔になり、こちらに走ってくる。  
「こいつたちやーん！！」

(え・・? イタちゃん・・? つて誰だっけ・・。)

「アントニー。コイツはフュリシアーノだ。これから、お前とロヴィーノの班で働くことになる。頼んだぞ。」

ルートはそう親分に伝えた。そつ、俺の名前は、「フュリシアーノ」だ・・・。

「ん・・。ああ、わかつたわ。任しどき!!--」

親分は親指を立ててウインク、俺を送り出してくれた時の王さんみ

たいな感じ（もろかぶつてこる）でルートに話しかけた。

「ロヴィーノ。コイツは今からお前の子分やーしつかり仕事教えた

るんやで!」

親分は隣にいるロヴィーノといつ少年にさう言つた後、ロヴィーノ

が答える間もなくしゃべりだす。

「ほな!俺、他の奴らにもフュリシャンの事紹介せんといかんから。また明日な!!--」

親分は、ルートやローテリヒさん、バッシュコさんに軽く挨拶をすま

せ俺とロヴィーノの腕を引き、そそくさと広場を立ち去つた。

「ふう・・・。フュリシアーノ!!--あかんやないか!!--俺との約束やぶつてしまもたら!--」

灯りが付いていない月明かりのみに照らされてこるつす暗い部屋で、親分がいきなり俺にお説教を始めた。

「やく・・そく・・? ? ?」

俺はなんの事だか分からなくて首をかしげた。すると親分は一回溜息を吐きだして。

「名前、大事にせえつて言つたやないか・・・。」

親分は目線を下に向けている。少し怒っているのだろうか。

「あ・・・。」

俺は親分に言われて思い出した。自分の名前が「フヨリシアーノ・ヴァルガス」ではないことを。そこまでは思い出せたが、自分の本当の名前が思い出せない。

「自分の名前、覚えてないんか。もうみんな記憶書き換えられてしもてるで。俺も、さつきまで覚えとったんやけど・・・。」

(え・・?)

「お前がよく考えないでコイツの名前大声で言つたからだぞ! ばかやろー! ! あん時お前が名前呼ばなかつたら、ルートはみんなに忘却魔法かけなかつた! ! 」

ロヴィーノはちぎーといった感じで親分の事をつづっている。

「しゃあないやないか! 俺、そこまで考えられるよつな頭もつてないわ! 」

それから3分くらい親分とロヴィーノの言い争いは続いた・・・。

「いひなつたら最後の手段や・・・みんなで自分の名前を取り返しに行くで! 6つ先の駅らへんに住んだる「フランシス」ってヤツがホンマの事知つとるて聞いたことあるわ! 」

親分は言い争うの途中で思いついたらしく、フランシスという人の所へ行こうと言つ出した。

「本当か! ? このやろー! で、電車の切符はどこにあるんだ? ! 」

ロヴィーノは目をキラキラ輝かせて親分に聞いている。

「あ・・・ないわ。」

「「え」・・・。」

しばらく、元の世界には帰れなそうです・・・。



## 結成、麻屋トリオ。（後書き）

なんだか最近、ただでさえボロクソな文法がボロボロクソクソになつてますね。こんなになつても読んで下さる方感謝ですよ～！！頑張つて完結させたいと思います！（まだ当分続くのかなあ・・・）

## 黒鷲（前書き）

昨日の夜、寝ないでずっといろいろなことを考えた。でも俺は、本当の名前を思い出すことも、元の世界に戻る方法を見つけることもできなかつた。そして、この日の朝をきっかけに、時の歯車が回り始める。

がさがさ・・

俺は昨日からずっと起きていたが、まだ朝早いので布団の中でうずまっていた。すると部屋の入り口から誰かが歩いてくる音が聞こえた。その足音は俺の頭の所までやつてきそうなもんだから、ちらりと怖くて布団を頭までガバッとかぶつた。

「橋の所まで来い。あんまりメシ食つてないんだろ。たまにアーサー手作りのが出るしな・・。うまいメシ食わせてやる。・・・早く来いよ。」

その声の主は化け物でも、妖精さんでもない。ルートだった。

「ルートっ・・?!

俺はすぐに布団から起き上がったが、そこにルートの姿はない。（もう行っちゃたのかな・・。足早いな、ルート・・・。）

（行つてみようヒ・・・。）  
橋を渡りきると、横にはルートがいた。  
(いつの間に・・・! ルートってニンジャなのか・・・!) [冗談です。])

「こっちに来い。」

ルートはそう言つて俺をトウモロコシが植えられている畑の後ろに連れていった。

「ここなら、人目には付かないだろ。トウモロコシの葉で隠れるからな・・。」

そう言いながら辺りに人がいないのを確かめ、懐からタケノコの皮に包まれたおにぎりを取り出し、食え。といって俺に差し出した。俺は差し出されたおにぎりを手にとつてすぐに食べ始める。おにぎりを食べていると抑え込んでいた感情が湧いてきて、思わず泣いてしまった。

「泣くな。きっと戻れるから。」

ルートは俺をおにぎりを食べ終えたのを見るともう一つおにぎりを差し出しながらそう言った。

「ルートも名前を、忘れてしまったの？」

俺は泣きながらルートに尋ねた。

「ああ、そうだな。だけど俺は・・・まだ帰るわけにはいかないから、いいんだ。」

ルートは、空を見上げながらそう言った。そんなルートの姿を見ていたら、いつも間にか涙も収まっていた。

「一人で戻れるな？」

ルートは俺を橋まで連れて行ってくれた。

「うん。ルート、ありがとう。俺、頑張るね・！・！」

橋を渡りきり空を見ると、黒く大きな鷺わしが飛んでいるのが見えた。

**黒鷲（後書き）**

読んで下さった方々、本当にありがとうございます。次話では不憫さんが出でくるようです。不憫ファンの方々は楽しみにしていくださいね！

## クニナシ（前書き）

橋の所で会つた鷺、それは、ルートなのだろうか  
「動画「フヨリとイタリの神隠し」を小説化してみた  
？」

——

## クニナシ

「うわあ・・・。おつきいなあ・・・。」

俺は上空を舞う大きな黒鷺を見て、そう言いながら湯屋へと向かつた。しかし俺は、とある声に呼びとめられた。

『おい。そこのヘタレつぽいヤツ。』

聞いたことがあるような・・・ないような・・・。あやふやした声だ。俺は誰だらうと思つて後ろを向いた。そこには、半透明の人間がいた・・・。

「幽靈！？ぎいあああああ！！！！なんでもするから！なんでもするから殺さないでえええ！！！！！」

俺は無我夢中で叫んだ。

（まだ元の世界に戻つていないつてのに、死にたくないよおおお！――）

『ああ！――もう！何もしねえよ！なんでもするんだよな？お前。』

半透明の人は俺にそう聞いてきた。

「うん！なんでもするよおー！――お願いだから殺さないでえええ！――」

答えはもちろんイエスである。

『なら・・・。一つ頼んでもいいか？俺はもう、存在すべき国じやなくなつたから、もう、帰れないが・・・。ルートヴィッヒはもう、帰らないと駄目だ。頼むから、あいつを連れて帰つてくれないか？』

半透明の人はそれだけ言い残し、さささーと消えてしまった。

（なんだつたんだろう・・・。さつきの・・・。ルートを元の世界に戻してつて言つてたけど・・・。ルートも俺の世界から来たのかな・・・？だからルート、俺の事知つてたのかも・・・。まあ、いいや。早く親分たちの所に行かなくちゃ・・・！――）

俺は急いで親分たちの所へ向かった。

「もう一ビ」行ってたんや？！俺とロヴィーノ、めっちゃ心配してたんやで…」

親分はロヴィーノと一緒に説教を始めた。まあ、この一言で説教は終わったのだけれど。

その後俺はいたって普通な一日を過いした。

『おい・・・！お願いだから、ルートを・・・ルートを連れて帰ってくれ・・・！』

俺は真っ暗な場所に立っていて、声だけがその場に響いていた。（この声・・昨日橋の所で会った・・・。）

「　フ・・・やん！！フ・リ・・・やん！！フ・リちゃん！  
がばつ！

「ゆ・・夢かあ・・。」

俺は親分の声で夢から覚めた。今のは・・夢、だつたのか。

「どうしたんだ？フエリシアーノ？」

ぼーっとしている俺を見て、ロヴィーノが肩をゆすつてくる。

「夢・・って、何があつたんや？怖い夢でも見たんか・・？」  
親分は心配そうな顔をしている。ルートを連れて帰つてくれと、橋でも言われ、夢でも言われ・・・。もしかしたら、聞き流してはいけないのかもしれない・・・。かといって一人でどうにかできるわけではない。そうだ、親分たちに相談しよう。そうすれば、きっとルートも、俺も、みんなも、元の世界に戻れる・・・。

「あ、あの・・！」

俺は親分達に昨日会つた橋での出来事、今朝の夢、全部を話そつと

した。でも、その言葉は言い切ることができなかつた。俺たち三人がローデリヒさんに呼ばれたからだ。

「あ・・・。」

「そんな所で寝ぼけてないで、さっさと仕事に取り掛かりなさい！」

全く！このお馬鹿さんが！」

ローデリヒさんは頭に付いているマリア・ツェルをピゴペコさせて怒つてゐる。

「タイミング悪いぞ、このやうー···。」

「しゃあないなあ···。 フヨリけやん、すまんなあ。 その話、夜の自由時間に聞かせてもらえつか？」

二人はそう言って、まだ起きたばかりで用意のできていない俺を置いて仕事を向かつた。

(早く準備して仕事に行かなきや···！)

俺は急いで支度を済ませた。ふすまを開けて廊下に出ようとするとい、後ろの方から紙のこする音近づいてくる。

「なんだろ···？」

俺は首の正体を確かめようと、ガラス張りの扉をガラツと開け、外の手すりに寄りかかつて外を見た。するとそこには黒鷺と、その黒鷺を追つている紙のような鳥が飛んでいるのが見えた。黒鷺の方は何やらぐつたりとしていて、フラフラしながら飛んでいた。

「橋の所で見た鷺だ！」

俺はその黒鷺を見てルートだと思った。なぜそう思ったのか分からぬ。でも、直感的に感じたんだ。あれは、ルートだつて。

## クニナシ（後書き）

やつと不憫君が出てきましたね。動画のコメによると、カオナシは孤独の神様らしいです。ピッタリですね。今回も読んでくださいありがとうございます！次話もよろしくお願ひします！

## 仲間。（前書き）

俺はもう、一人じゃない。それは今だけじゃなくて・・・。これから先も、一人でなんでも解決しようとしてた今までだつて、「ひとりぼっち」なんかじゃなかつたんだ。ニコニコ動画「フェリ」とイタリの神隠し」を小説化してみた

卷之三

俺は黒鷺に向かつて叫んだ。すると黒鷺はさきまでと同じようにフラフラしながら、こっちに向かつて飛んでくる。俺はルートが部屋に逃げ込めることができるようにガラス張りの扉を思いつき開けた。

ガガガガガガ・・・！！

俺がドアを開けたのと同時にルートが入つて来た。ルートを紙のような鳥の一部はガラス張りの扉に張り付いた。  
(一)の鳥みたいなの・・・ただの紙だ・・・!さつき飛んでたのに・  
・・・!)

クオ・・・クオ・・・

部屋の中でルートが鳴いているのが聞こえる。何やうとでも弱々しい声だ。

一ノ谷トトロ

俺は急いでルートの元へ向かい、大丈夫?と声をかけたが、ルートは外を見つめたと思うと、すぐにバサバサッと外へ飛び立ち、麻屋の上方を目指し飛んでいつてしまつた。麻屋最上階にはアーサー

「アーサーのところへ行くんだ・・・！」

( デリシャソウ 。 あんなに弱ってるのに ・・・ ! ルートが死んじゃ

۲۱۰

俺は走つて部屋を出て、アーサーの部屋へと向かつた。階段を上ろうとしたところで、階段を上がつて来た親分たちに呼び止められた。

「フヒつりやん、どしたんや？！そんなにあわてて・・・。それに

泣いとるやないか！」「

親分とロヴィーノは心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「ルートが死にそなんだよ・・・！今、アーサーの部屋に向かつて行っちゃつて・・・！すごい弱つてたのに・・・！」

俺は泣きながら、それだけ言つてその場に座り込んでしまつた。

「そうか・・。なら、ルートを助けに行かな！こんなとこで泣いとつたらあかん！」

たつたあれだけの言葉ですべての事が分かるわけがない。それなのに、親分はいつもとは違うキッとした目つきで俺を見つめ、しっかりと口調で俺の腕を掴みながらそう言つた。ロヴィーノも、言葉を俺に伝える事はしていなかつたけど、しっかり俺を見つめていたから親分と同じような気持ちなんだろ？

俺は、あの時どれだけ一人に救われただろう。

「おや、ぶん・・・ る、う、いーの・・・！」

俺はもう涙が止まらなくなつて、二人の腕の中に飛び込んだ。

「わあつとる。全部一人で解決しなくたつてええんや。みんなで、元の世界に戻ろうな・・・。」

親分はやさしい声で俺を励ましてくれた。

「う・・ん、うん・・・！」

俺は、凄く嬉しくて、また泣いてしまつた。だけど、今度の涙はさつきのつらい涙とは違つて、嬉しさから出た涙だった。

「ほな、フーリちゃんの涙が收まつたとこで、アーサーの部屋行こか。急がなあかんのやろ？」

親分はいつもの明るい笑顔で、俺に手を差し伸べた。

「そだぞ！このやろーーーもう結構時間たつてるぞ！」

そうだ。俺は、一人じゃないんだ。俺には一緒に元の世界に戻る仲間が、一緒に元の世界に戻る方法を探してくれる仲間がいるんだ。

「うん。行こう。この世界からルートを、みんなを助けだすために。  
・  
・  
・  
・」

それからの俺の心には、「迷う」なんて言葉も、「一人で解決する」なんて言葉も存在しなかった。

仲間。（後書き）

どうでしたか？一人じゃないのはイタリア君だけじゃありません。今この文を読んでいる貴方も、あなたの周りにいる、ひとりぼっちに見える人も、です。どんな人の周りにも、その人を良く見てくれている方がいるはずです。いないと思っている方は気づいていないだけだと私は思います。

そんな事が伝わればいいなあ、と思い書いてみました！10話まで読んでくださって本当にありがとうございました！

## 子供部屋（前書き）

俺は親分とロヴィイー、二人の仲間と共にルートを助けにアーサーの部屋へと向かつた。アーサーの部屋にたどり着く前に着いたのはやけに散らかつた子供部屋で。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」を小説化してみた

アーサーの部屋に行くにはエレベーターを使つしかない。が、エレベーターはいつもバッシュさんがエレベーターボーイをしているのだ。アーサーの部屋に行きたいですなんて言つたら、いきなり発砲されるに決まつてこる。

「どないしょ・・・。」

親分は頭を押さえてアーサーの部屋に行く方法を考えていた。その横には、窓の外をポケーッと見ているロマーのがいる。田の前で手を振つても全く反応がない。

「ロヴィーノ？？」

俺はロヴィーノの肩をポンポン叩きながらロヴィーノに呼びかける。ロヴィーノはいきなり田を見開くと、俺たちに一つの案を提案した。「あのよ・・・。窓から出て屋根の上渡つて行けばいいんじゃないか・・・？屋根の先に梯子あつたから結構上まで行けると思うぞ。」ロヴィーノは淡々と話した。

「え・・・。そなん？ロヴィーノ。」

今度はロヴィーノではなく親分がポケーッとしてしまつた。あれだけ一生懸命考えていたのにローヴィーノに案を出されてしまつたのだから理解できなくもないが。

「じつちだ。」

ロヴィーノは廊下のつきあたりにある、少し小ぢめの窓から屋根にトンつと飛び降りた。俺と親分はロヴィーノの背中を追つてゆく。しばらく進むとロヴィーノは歩を進めるのをやめた。

「ここから先に行くには塀を歩いて行かなきゃいけないんだ。」

ロヴィーノがそう言った先には平均台くらゐの幅の塀がある。落ち

たら死ぬといつもくらいの高さがあった。

(ヴュ・・ヴュヒヒヒヒヒ！――――――――――――)

いつもなら白旗を振つて逃げかえつているところだ。だけど、今はそんなことしない。できない。俺は先に堀を歩いているロヴィーノの背中を追いかけた。

「ハアツ・・ハアツ・・！渡りきれたよー！――

俺はやつとの思いで堀を渡りきつた。親分は俺とロヴィーノの後ろを歩いていた上に、堀を渡るのがすぐ遅いようまだ堀を歩いている。

「おやぶん！大丈夫～？」

「ん・・・ああ！だいじょう・・うおつ！」

全然大丈夫に見えない。俺がハラハラして親分を待つていると、ロヴィーノは「先行つてんぞ～」と言つてすぐ後ろにあつた梯子を上りはじめた。

「あ・・！ロヴィーノ！親分の事置いてっちゃつていいの～？」

そう言いながら俺も梯子を登り始めていた。すると、ロヴィーノは梯子を上るのを止めて俺の方をジッと見た。

「お前・・むきむきジャガイモの事助けたいんだろうが。なら早く行かねえと。」

ロヴィーノはそうとだけ言つと再び梯子を上り始めた。

(むきむきジャガイモつて・・ルートの事なのか・・？確かに俺はルートを助けたい・・・。親分ごめん、置いていきます・・。)

俺はロヴィーノに返事をしていなかつた。だけどロヴィーノの背中を見ていると言葉なんか使わなくても俺の気持ちが通じているような気がした。俺はロヴィーノと一緒にそのまま梯子を上つていく。ルートを助けたい。その気持ちだけが俺の頭の中を埋め尽くしていく。

「おーい！もうすぐ梯子無くなるぞ～！」

かなり梯子を上ったところでロヴィーノはそう告げた。俺もかなり疲れていたけど、親分の方が疲れているだろう。親分は俺たちが置いていった後、ありえない速さで俺たちを追いかけてきたのだ。今は後ろでゼエヒューゼエヒュー言っている。

「窓・・だな・・・」

梯子を上りきるとそこには大きなステンドガラスの窓があった。

「この窓・・開くんだけうな・・このやべー・・・。」

やつ面つてからロヴィーノはそろそろと窓を押した。

「わわわわ・・・

（おー！開いた！！）

そこはまだアーサーの部屋ではなかった。バスルームのようだ。俺たちは誰かに見つからないようにそろそろと歩を進めていく。バスルームを出て左へ曲がり、そのまま歩いて行くと、俺たちは子供部屋のような所に着いた。

「なんや。アーサーの部屋とちがやうやんけ。」

「やけにおもちゃが散らばつてるぞ・・・。あ・・これ・・・。」

「！・・・」

俺たちは机の上にスコーンを見つけてしまった。なんだか良くないことが起こる気がしてきた。

（運気下がったよね。絶対。）

部屋をうろちょろしていたその時、

「ああ？そんなの適当に処理しとけ！ばかあー！」

何やら電話をしているアーサーの声が聞こえる。かなり怒っているようだ。会話を終えるとチャリンという受話器を切る音が聞こえた。

「つたぐ・・なんでこいつもうまくいかねえんだ・・・。」  
アーサーの声がだんだん近づいてくるのが分かる。

( ) ( )  
ֆ�ՈՂԵԱ • • . . . . ( )

## 予供部屋（後書き）

今回はあんまり話が進みませんでしたね。わざと次の話では話が進むんです！え、親分の扱いが酷いって、『気にしちゃダメですよ！』1話まで読んでくださつてありがとうございます！

## メタ坊、現る。（前書き）

「アイスくれたら道案内してあげる。。。」俺は、小さな取引をした。ルートを、俺の仲間を助けだすために。。。絶対、死んじゃ駄目だよ、ルート・・・！！！二コ二「動画」「フェリとイタリの神隠し」～小説化してみた～

## メタ坊、現る。

“ ちよ・・・アーサー来おつたで！はよ隠れな！！”  
アーサーに聞こえないような小さな声で話しながら俺たちは慌てふためいた。アーサーがこっちに来るなんて思つてもいなかつたから。“ おい！このクッショーンの山ん中入つてればばれねえんじやねえか？”

ロヴィーノが指をさした先にはクッショーンの山がある。俺たち三人は急いでクッショーンの中に入った。

「ある～？ わ～い、ある～？」

アーサーはやつて来てすぐに人の名前を呼びだした。誰かを探しているようだ。

俺たちはクッショーンの山の中でアーサーがこっちに来ないことを祈つた。が、その願いは神様の所まで届かなかつたようで。

「ん・・。もしかしてまたクッショーンの山ん中で寝てんのか・・？」

育て方間違つたかな・・・。」

そう言いながらアーサーは俺たちがいるクッショーンの山の前までやつて来てクッショーンの山を崩し始めた。

（（（うわああああ！！！やめてええええ！！！）））

そう思つたのと同時にアーサーはクッショーンの山を崩すのを止めた。こっちの願いは神様に届いたのだろうか。

「あるう～！ またこんな所でねんねしてたのかあ～？ まつたくもあ～、きちんとベッドで寝ろつていつただる～？」

（（（え、・・・・・。え、え、～？！）））

俺たちは自分の耳を疑つた。アーサーが聞いたことのないような高い声を出して話している。あのアーサーが。（アーサーさん、最初のイメージからどんどん離れていく・・・！）

！）

俺は最初のアーサー想像イメージがどんどん壊れていくのを感じた。それは一人も同じだったようで、目を白目にして固まっていた。

「ん～じゃあ、良い子でねんねしてるんだぞ～アル」

少しするとアーサーは子供部屋をでた。そしてもといた部屋に戻つて誰かに「そいつの事治療しとけよ。俺はホウキに乗つてちょっと見回りに行つてくるから。」と言つている声が聞こえた。

「もうええんやないか・・？」

親分の言葉で俺たち三人はクッショーンの山から出ようとした。が、がしつ・・・！

「ひょえ・・？」

三人の中で俺だけがクッショーンの山の中にいる誰かに腕を引っ張られた。さつきアーサーが話していた「アル」という人だろうか。

「お前、俺にアーサーのスコーン食べさせに来たんだな。あれ食うとメタボになるんだぞ。」

そう言いながら小さな男の子は右手にハンバーガー、左手にシェイクを持ち、それを交互に食べている。

「君、メタボなの？つてか、こんな所に引きこもつてた方がメタボになるよ！運動不足で。」

俺はこの子の将来の健康が気になつたので食のアドバイスをした。

「運動したくないからここにいるんだぞ」

・・・・・。この子は反抗期なのか・・？まあ、いいや。コイツがメタボになつて死のうが関係ないしね。メタボになつて死ぬのかどうかは分からないけど。そんなことはどうでもいい。俺は、ルートを助けに來たのだから。

「あのさ、俺の大事な仲間が大変な目にあつてるの。だから、今すぐ行かなきやいけないの！お願ひ、手を放して・・？」

俺は反抗期の子供にそう言つた。一刻も早くルートの元へ向かわなければならぬのだ。

「ええ～・・・。じゃあ、アイスおごつてくれる?なら、君の仲間に会わせてあげる。ルートヴィッヒって人なんでしょう?」

反抗期少年は俺に取引を持ちかけてきた。アイスくらいなら・・・。

「うん!わかつたよー!俺特製のアイス作つてあげる!」

そう言うと反抗期の子供はいきなり目を輝かせて。素直な少年の瞳を取り戻した。

(うわあ・・。この子扱いやさしいよお・・・。ヴェ・・・。)

「こっちなんだぞ!」

少年はクッショーンの山をバゴンと跳ね飛ばし、タタタタタ・・・・と走つて道案内を始めた。

「あ・・。おい、フーリシアーノ!お前ビコに・・・

「また後で話すよ」とにかく今は俺についてきて!なんか案内してくれるみたいだから!!--

俺は走りながらロヴィーノに返答した。

-待つててね・・ルート・・・!-絶対、死んじや駄目だよ・・

!!

俺は強くそう願いながら少年の後を追つた。

## メタ坊、現る。（後書き）

なかなか話が進みませんね・・・。本当にすみません・・・。まあ、そのうち終わりますから。読んでくださっている方は頑張つて読み切つてください！感想、評価の方大歓迎です！（優しいアドバイスなども下さるとうれしいです！）今回も読んでくださつてありがとうございました！！

## 希望のヒカリ（前書き）

ルートは闇の中を進んでいく。俺は声を出さないように、いや・・・。出せずにルートの背中に乗っていた。「『』動画「フリヒ」とイタリの神隠し」～小説化してみた～

「ううちなんだぞ！」

アルは俺が初めてここに来た時に契約書に名前を書いた場所に立ち、石の床を指差した。そこにはルートがいた。血まみれになつたルートが。

「…………ルート…………」

俺は勢いよくルートの元へ駆け寄つた。ルートは黒鷲の姿をしたまま倒れていた。意識はないようでぐつたりしている。後ろから、あいつルートヴィッヒなんか・・？　さあな、アイツがそう言つてんだからそななんじやねえの？　という親分とロヴィーノの会話が聞こえてきたが、今はその会話に入るべきときじゃない。ルートの事が最優先だ。

「ルート・・・・・ねえ、ルート！ 目を開けて・・・・！」

俺は泣きながらルートを抱きしめ、ルートの名前を呼んだ。何度も、何度も・・・。しかしルートは目を開けてくれない。

「死んでないよねえ・・・・・るーとお・・・・！」

「そいつはまだ生きてる。心配しなくていいんだぞ。ああ、今からそいつをこの穴の中に落とす。妖精たちがそう言つてる。」

アルはルートを指差しながら言つた。俺は周囲を見回し妖精さんとやらを探した。が、そんなものはどこにも見つからない。

「お前にも見えないんだな。きっと心がフジュン？なんだよ。アーサーが、妖精さんが見えない奴はみんなそうなんだって言つてた。」

アルはそう言いながら天井の方を見上げている。

「待つて！！！ どうして妖精さんたちはルートを落とそうとしてるの・・・？ ルートは何もわるいことしてない・・・！」

俺はルートをギュッとさつきより力強く抱きしめた。ルートが穴の

中に落とされないよう。穴の中は暗く、そこが見えない。それほど高い所から落とされたらルートは死んでしまうだろう。

（絶対ダメ・・・！ルートはみんなと元の世界に戻るんだ・・・！）

そう思つてゐる間に、ルートが何者かに押されているのを感じた。  
妖精さんなのだろうか。

「ダメ！！放して・・・！」

俺はどこにいるか分からぬ妖精さんに声をかけた。その声は妖精さんには届かず、俺はルートと一緒に穴の中に落ちた。

「フヨリちゃん　！！！」

「フヨリシアーノ・・・　！！！」

一人の声が俺を呼んでいた。俺は穴から見える少しの風景とともに自分の意識が遠のいていくのを感じた。

ヒュ～・・・

気がつくと、俺はルートの背中に乗っていた。ルートは黒鸞の姿で暗い道を抜けていく。俺は何も言葉にせず、ただただルートにしがみついていた。ルートは凄い速さで暗闇を翼で切っていく。

しばらくすると田の前に小さな光が見えた。それは、俺たちが元の世界に帰るために希望の光だったんだ。

## 希望のヒカリ（後書き）

今日は短いですね～・・・。切る所が見つからなかつたんです。スマセソ・・・。まあ、今回も読んで下さつたその貴方！本当にありがとうございます！次話もよろしくおねがいします！

## アタカイ涙（前書き）

涙は涙でも。泣いた理由が違うのなら。その価値も変わるものなのです。二二二二二動画「フューリとイタリの神隠し」→小説化してみた

## アタカイ涙

ルートはものすごい速さで暗闇を切り抜け、光の元へと向かっている。

ががががが・・・・・!

俺とルートは見覚えのある部屋に落ちていた。そこは、王さんの部屋で。

「あいやあああああああ……我の部屋があああああ……」

王さんは驚愕していた。そして、何があつたんだといつよつに辺りを見回して、俺とルートの存在に気付いた。

「あいや? フロリシアーノ? それに・・でつけ麺あるな・・・・。

王さんは床に倒れているルートと俺を見ながらさう言つた。俺はとりあえず状況を説明しようとした。

「この鶯、ルートなの・・・・・アーサーの部屋の穴から落ちて、

ここに・・・・・!」

俺が話している途中で王さんは「そつあるか・・・・。」と言つながら手を俺の目に前に手を出して話を止めた。

「そんな話してる暇はないあるね。とにかく、コイツの怪我を治せばいいあるな? そんなの我にしてみればお茶の子さこさいの朝飯前あるーー!」

そう言つて王さんは床で寝ていたヨンスを蹴り起こし、「漢方作るあるから材料持つてくるよろし! 急ぐある!」といつてヨンスを使いに行くように伝えた。ヨンスは蹴られてから一秒もしないうちに起き上がり、「やっぱり兄貴には俺が必要なんだぜー」と上機嫌で部屋を出でていった。

俺はヨンスが戻つてくるまでのあいた時間に、さつきは話せなかつた、ルートの事や元の世界の事、フランシスという人が俺たちについて何か知つているということ、その人の所まで行くには電車の切符が必要なことなど、いろんなことを話した。

「あいや・・そうあるか・・・。ん・・? 電車の切符・・? どこかで見たような気がしなくもないある・・!・!・!」

そう言つて王さんは簾笥をガサゴソしながら漁つている。

ガラツ・!

いきなり、すごい勢いで扉を開いた。

「フェリちゃん・・!・!」

「フェリシアーノ・・!・!」

親分とロヴィーノが扉をあけたようだ。親分の腕には小さなアルがちよこんと抱えられていた。二人は肩を上下に大きく揺らしている。「ルートも、フェリちゃんも!! 大丈夫なんか? アルが、穴はワニヤオ王躍の部屋に繋がつてゐる言うてな。走つてここまで来たんや。あ、妖精さんたちがルートの事落とそうとしてたんは、ルートを治療させるためやつて・・・! アーサーの命令らしいわ!」

(アーサーの命令つて・・? アーサーは俺たちの「敵」じゃないの・  
・!?)

そんな事を考えていた最中に、

「あつたある!! これあるよ!!」

頭まで簾笥に入れて何か(切符だろうか)を探していた王さんは、やつとその「何か」を見つけたようで頭を簾笥から出し、俺の元へと小走りでやつて来て小さな紙を俺に手渡した。

「うわっ!! なんや、王躍いたんか・・・。てつきりまだ寝てたんかと・・・。」

(親分つて人に気づくの遅いよね。)

王さんは親分を2・3秒睨みつけてから俺に紙きれの正体を明かした。

「これは、電車の切符あるよ。これがあればある程度駅まで行くことができるある。3人分しかないあるが・・・。」

王さんは申し訳ないよう言つた。が、切符があるだけでも俺たちの道は開かれる。

「ううん!! ありがとう、王さん!! 俺、フランシスって人の所まで会つてくるよ!! だから、そしたら、みんなで元の世界につ・・・」

「!..」

この世界に来てから前よりも涙もろくなつただろうか。ただでさえ泣き虫なのに。俺はまた泣いてしまつた。

「分かつてある。無理して言葉にしなくてもいいあるよ。」

王さんは俺の頭を優しくポンポンとなしてくれた。その手はとても温かかった。

俺は少しの間泣いた後すぐにスタッツと立ち上がつた。そして、電車に乗るにあたり重要なことを決める。

「誰が、俺と一緒に行く・・??」

俺はあと一人、一緒に電車に乗る人を探していた。最初に名乗り上げたのは、親分でも、ロヴィーノでも、王さんでもなくて。

アルだつた。

「ねえ・・。僕を、一緒に連れてつて・・!」

幼いのに、力強く、まっすぐした眼で俺を見つめていた。その眼からは、みんなの事を助けたいという気持ちがしつかり伝わってきて。すると、すぐに二人目が見つかった。

「俺も、一緒に行ってやつてもいいぞ・・!! このやろーがつ!! ロヴィーノのその言葉からは、素直ではないけれど人を思いやる優

しさがにじみ出でていた。

「うんつ・・・！うんつ・・・！一緒に行こう！三人で・・一緒に・・・！」

本当に、俺は涙もろくなつた。でも、この涙は、うれしさから出たものなんだよね・・？なら、この涙は弱いものじゃないよ？ 宝石と同じくらい、ううん。宝石なんかより、もっともっときれいで、大切なもののなんだ。

俺は手で涙をぬぐつたときに手に付いた涙に、じんわりと「温もり」を感じた。

## アタカイ涙（後書き）

何だかテンポの悪い話ですね・・・。いつもあるとよくなれる～とか、ここはいいんじゃないですか～みたいなアドバイスを待つております！ここまで読んでくださって本当にありがとうございます！次話の方もよろしくお願ひします！

# 薔薇の園（前書き）

「やつとここまで来れた。フランスさん所まで……。あと少し、なんだよね……?」  
「『「動画「フェリとイタリの神隠し」』」  
小説化してみた

「わたしはヨンスが使いから帰つてきたらルートの治療を始めるある。お前は3人でフランシスの所に行くよろし。みんなで待つてゐるあるよ。」

そう言いながら王さんは俺の頭をポンと叩いてから、俺たちを送り出してくれた。

「行つてくるね・・・・・！」

俺は、王さんの部屋の鉄の扉をガチャリと開けて外に出た。

「お前、置いてかれてしまったあるな。」

王躍(ワシヤオ)はひとり麻屋に取り残されることになった俺を見てそう言つた。

「そやなあ。置いて・・行かれてしもたなあ。せやけど・・。俺、親分やさかい。子分の独り立ちは嬉しいで！」

だから、きちんと答えた。本当は寂しかつたけど、嬉しつゝ嘘ついて。

(アルが行く言つなんて思つてなかつたからなあ・・・。ポンマはフェリちゃんとロヴィーノと、一緒に行きたかつたんやけど・・・。独り立ちせな開かんのはロヴィーノじやなくて、俺かもしけへん・・。子分離れせな・・。今頃3人ら何やつてるんやろ・・。)

「ねえ。ロヴィーノ。駅つて、こっちにあるんだよね。」

「ん・・。そうだと思うぞ、このやろーが！！」

俺たち3人は麻屋の裏口を出て駅へ向かっていた。そこはとても神秘的な場所で、海と青空が水平線を作り出していた。後ろに麻屋がある以外はなにも見えない。線路の上にも海水が少し浸つていたから俺たちは靴と靴下を脱いで線路の上を歩いていた。

「線路辿つてけば駅まで着くだろ。一応線路の上歩いてんだからこれであつてんじゃねえの？」

3分ほど歩いた所だろうか。

「あ！あれが駅なんじゃないかな？」

アルはさつきまで周りをきょろきょろ見ていたから話していなかつたけど、いつの間にやら俺たちの間で歩いていて、いきなり口を開いたものだから少しひくりしてしまった。

「うわっ！アル、いつからそこに？！」

「さっきからずっとここにいたんだぞ！」

頬をぷくーと膨らませて怒るアルは何だか少しかわいかつた。

そんな風に話しているとあつという間に駅に付いた。

「電車つていつ来るんだ？」

ロヴィーノは腕を組み不満そうにそう言った。

「あ！小さいけど遠くに見えるよ！電車！」

電車はあつという間に俺たちの前へやつて來た。するとフシューといつた音を立て扉が開き、そこに車掌さんが立っている。

「あの、3人分らしいんですけど・・・」

俺は車掌さんに王さんにもらつた切符を差し出した。すると車掌さんはホワイトボードに『その切符で行けるのは薔薇の園までです。』という文字を書いて俺たちに見せた。何だかエリザベスおつといけない。

「じゃあ、薔薇の園までお願いします。」

そう伝えると、車掌さんが運転席まで戻つて行つたということは料金支払いが終わつたということなのだろう。俺たちはそう理解して電車の中に乗りこんだ。

電車の中には黒くて半透明の人が何人か乗っていた。生きている人とは思えない。

「とりあえず、席座ろうぜ。」

ロヴィーノが席に座つたので俺とアルも席に付いた。アルは椅子の上で軽くジャンプしながら外を眺めている。

周りが静かだから何だか俺たちも話をしていなかつた。これから起ころるであろう事への緊張つていうのもあるのかな。薔薇の園は案外遠くて、もう辺りは暗くなつてゐる。一緒に乗つていたお客様も途中の駅で降りてしまつたので電車の中にいるのは俺たち三人だけだつた。

アルは電車の中ではしゃぎすぎで疲れたようで寝息をたてて眠つていた。ロヴィーノも首を上下に揺らしながら、必死に眠気を押さえている。

電車は音を立ててとまつた。駅の名前が書いてある看板を見ると、そこには『薔薇の園』と書かれていた。

( 着いた・・・・・! )

「ロヴィーノ！アル！起きて！！駅に着いたよ！」

俺は肩をゆすつて二人を起こした。

「本当か？！」

「ホントに？」

いきなり復活した二人は元氣よく駅に降りた。まるで遠足にきた子供のようだ。

ガシヤン。

電車はドアを閉めて次の駅へと走つて行つてしまつた。

しばらく電車を眺めていたら、ロヴィーノは待ち切れずに俺を呼んだ。早くフランシスさんの所に行きたいのだろう。

「おら！行くぞ！フェリシアーノ！！」

「うん！？」

フランシスさんは、何を知ってるんだろう。どんな人なんだろう。  
う・・・。

俺の胸は、嬉しさと期待でいっぱいだった。絶対、みんなで元の  
世界に戻るんだ。

## 薔薇の園（後書き）

読んでくださつてありがとうございます。感想・アドバイス・評価  
もらえるとかなり嬉しいです。次話の方も読んでやってくださいね。  
またまたですが、ここまで読んでくださつて本当にありがとうございます！

## フランシス・ボヌフォア（前書き）

ああ。俺を呼んだのは、お前、なんだよな……？

動画「フューリとイタリの神隠し」を小説化してみた

フランシス・ボヌフォア

「ねえ・・・。本当にひつじであつてるのかい？家とか何にもないぞ？」

さっきまで無邪気にはしゃいでいたアルは俺の服を強く握っている怖いのだろう。今歩いている場所は、怪しい月明かりに照らされた青薔薇が一面に咲き誇っている場所だった。怪しく輝く月の光を反射している薔薇の中を歩くのは俺だって怖いくらいだ。

俺たちは駄の前にあつた薔薇のアーチをくぐって来た、その先にランシスの家があると思ってここまで歩いてきたが、一向に家に着く気配がない。

「アーチがあると、この先に何かがあるような気がするだろ?」の場合は「家」な。」

キユウ。キユウ。

しばらく歩き続いていると、後ろから何かがやってくる音を感じた。

急いで後ろを振り返ると、そこには「ちりちりせんせい」と思われる光が見えた。ぴょんぴょんはねながら「ちりせんせい」に向かって走る。

アルフレッドは涙を滝のように流しながら叫んだ。まあ、来ないで  
って言われて止まる奴なんてあんまりいないよね。人魂は、歩を止  
めることなくこっちへやってくる。俺たちはその場に頭を押されて  
しゃがみこんだ。

キユウ。

人魂は俺たちの前で歩を止めた。ガタガタ震える俺たちに、話しかけてくる声がひとつ。

「なあ、君たち、俺を訪ねに来たんだろ？ならこっちに来い。ほら、顔上げる。」

大人っぽい優しい声に俺たちはゆっくり顔をあげた。

そこにいたのは人魂でも、他の化け物でもなくて。

「もしかして、ふら・・んしす、さん？」

「ああ。」

そこには、少し茶色がかつた金髪に、月とよく合ひう深い紫の瞳をしたおじ・・お兄さんがいた。光の正体はランプで、フランシスさんはランプの脚の上に乗っかつてここまではやつてきたようだ。

「ついてきこいや。」

フランシスさんはランプに乗つたまま来た方に跳んでいった。フランシスさんの言つた通り、俺たちはフランシスさんの後を追つた。

?ルー・・つ！ルートつ！起きて、ルートつ！！？

(誰だ？俺の名前を呼ぶのは・・・？フェリ、シアーノ・・か・・・?)

俺は暗闇の中にいた。上も下も右も左も全てが闇。声のする方を見ると、そこには闇とは対照的な光が見えた。俺はその光の元へ行かなければならぬと思った。光へと飛んでいけば、俺はこの暗闇から抜け出すことができるのか　　?俺は光の元へと向かった。光の中へ入つたとたん、俺は意識を失つた。

「う・・。うう・・・・。」

(ここは、どこだ・・・?)

目の前の景色はピントの合わないカメラのような感じに映つていた。人が二人見える。

「お。目が覚めたみたいなんだぜ！」

「そんなの見てれば分かるあるよ！　あいやあ……。わたしの事が分かるあるかー？」

（ん・・。コイツらは・・・。）

だんだん意識がしつかりしてきた。

「王躍に、えつと・・・ああ、ヨンスか・・。」

「ふえぬおーールート、ひでえんだぜ・・・ー！俺の事ベニラードー！」

忘れたんだぜ・・・。」

「うるせえあるーー！コイツは怪我人あるよー静かにするよーじーー。（お前の声も充分うるさ）こと違うのだが・・・。相変わらず、騒がしい奴等だ。）

「あ、おい。フェリシアーノ達はどうした？なんだか、フェリシアーノに呼ばれたような気がして起きたのだが・・・。」

俺は、王躍に尋ねた。

「おお・・！友の力ある・・ー！ああ、あいつらは・・。」

「

王躍は俺に今までのことを簡易に説明してくれた。

「そりだつたのか・・・。ありがとう。王躍、俺を助けてくれて。

俺はもう行かなければならない。失礼する。」

俺は自分の寝ていた布団をたたみ、礼を行つてすぐこの部屋を出ようとした。

「あいや・・？お前、その体で行くあるか・・？無茶しちゃいけねえあるよ・・ー！」

「そりなんだぜ！それに、俺だつてお前に貢献したんだぜー！」

二人は俺にまだ休むよつ言つてきたが、そんな暇はない。

「いや。いいんだ。本当にありがと。次に会つときは本当の世界で会えることを祈つていてる。」

俺は、俺のできる事をやらなければ・・・他の奴らだつて頑張っているんだ。 そうだな、最初に行くのは・・・。

## フランシス・ボヌフォア（後書き）

今回も読んで下さった方！感謝感謝です。本当にありがとうございます。やつとフランシスさんが出てきましたね～。まだまだ続く感じがします・・・。毎度の事ですが、感想・評価・アドバイスの方よろしくお願いします！最後に・・・いつもこの小説を読んでくださって本当にありがとうございます！！

## ツメタイ涙。 (前書き)

もしも神様がいるのなら。神様はひでえ奴なのかもしれない。幾ら頑張つたつて、俺は！！！ニコニコ動画「フヨリトイタリの神隠し」を小説化してみた

## ツメタイ涙。

「アル～？アル～？ビニにいるんだ～？」

俺はアルの子供部屋にいた。アルに会つたためにビニに来たのだが、アルが見つからない。

「ある～！出でてくれ～！…」

アルがいつも寝ているクッショーンの山も、ぬいぐるみがたくさん置いてある部屋の隅の方も、くまなく探した。大きな声を上げて走りながらアルを探したものだから、自然と肩が上下に動いていた。（アル・・？俺のそばから消えないでくれよ・・・。どうして・・・。）。

自分の部屋に戻つてもう一度部屋を見回した。俺は部屋の中心に立つてアルを探す。

ザツ・・

後ろから誰かの足音がしたので振り向くと、そこには俺を馬鹿にしているような顔をして立つてゐるルートがいた。

「アルフレッドがいないのに、今頃氣づいたのか？そんなにこの世界の管理が大変でアルフレッドを構つてやれないなら、アイツを創つたつて何もないだろ？お前も、もといた場所に戻れ。」

後ろを振り向くと、そこには俺を馬鹿にしてゐる様な顔をして立つてゐるルートがいた。

「お前が、アルを連れだしたってのか・・！」

怪我は治つたのかという言葉を口にする前に俺の口から出たのはアルの事だった。俺はルートの所までツカツカ歩いてルートの胸ぐらをつかんだ。

「俺が連れ出したんじゃない。アルフレッドは自分の意思でビニを

出たんだ。」

ルートは表情一つ変えずに口元だけを動かして俺にそう告げた。  
「アルの事はもう分かつただろう。俺は他にもやらなければいけないことがあるのでな。失礼する。」

ルートはそう言つとすぐに部屋を出ていった。

ガチャーン・・・

扉が閉まる音だけが部屋中に響く。

(俺の望む世界は、幾らやつても創れないってか・・・?!)

俺は、今の世界に納得できなくて。部屋の棚を倒し、机の上の物を一気に払い落した。俺は、そのまま床にヘナヘナとしゃがみこんで、ただただ泣いていた。

「うつ、うつ・・・・・ど、してだよお・・・!」

いくら泣いたって、いくら叫んだって、誰も、助けてはくれないんだ・・・!」

あの時の俺は、知らなかつたんだ。俺に優しくしてくれる奴がいることも。涙は、嬉しいときにも流せるつて事も。

ツメタイ涙。 (後書き)

たまに（結構？）かなり短い話がありますよね・・・。  
話も読んでくださつてありがとうございますーー！

今回の

## ルートとガルベルト（前書き）

ルート、帰れりよ。もとの世界に。お兄さんは、それを望んでる  
。――「」動画「フンリとイタリの神隠し」～小説化して  
みた。

## ルートとギャルベルト

「君たちは、俺に本当の事を教えてもらいに来たんだね?」

「フランシスさんはカップに紅茶を入れながら話した。

（あ、そうそう。あの後、俺たち3人はランプを追つて小さな家までやつて来たの。フランシスさんは途中で止まつてくれたりしたらアルも自分で歩いてついてくることができたんだ~。）

「本当は紅茶じゃなくて、ワインが飲みたいんだけどね。この世界にはないんだよ、ワイン。まあ、あいつの創った世界だから仕方ないっちゃあ仕方ないんだけどね。」

フランシスさんは俺たちの分の紅茶を入れ終わり席に着いた。

「で?君は最初に何を聞きたいの?」

フランシスさんは目を細めながら俺を見てそう言った。

（俺の聞きたいこと……。そんなの、たくさんある。だけど、一番聞きたいのは……。）

俺は一度、唾を飲み込んだ。

「ルートは……どうして怪我をしてまでアーサーに従つてたの……?」

するとフランシスさんは手を口元にあてて驚いた。

「うわっ。いきなりそれ聞いたやう?まあ、いいけどさ。」

俺はジッとフランシスさんを見つめた。

「……ルートはね。実のお兄さんを助けようとしているの。ビックりつたつて助けられない、お兄さんを、ね。」

（???）

俺は首をかしげた。もちろんアルとロヴィーノも。いきなりルート

のお兄さんがどうのこうの言われても何が何だかさっぱりだ。そんな俺たちを見て、フランシスさんは俺たちをみて子供を見ているかのようにフツと鼻で笑った。

「こきなり言われても分かんないよねえ。最初から説明すると……。この世界は、もとから存在したものじゃない。この世界は、アーサーの意思によつて創られたの。実はこの世界にはアーサーの手によつて創られた人もいるんだけど……。」

フランシスさんは途中で話を止めてアルの方を見た。ロヴィーノはそこから何を悟つたのか俺には分からなかつたが、ロヴィーノはハツとしてアルを抱っこして家の外へと連れていつた。

フランシスさんはロヴィーノ達が家から出たのを確認すると、再び俺に話を始めた。

「この世界にいるアーサーによつて作られた人は一人。アルフレッドとギルベルトだ。」

フランシスさんは人差し指と中指を立てながらそう言つた。

「アルフレッド……？！え、あ。アルの事？！あ、でも……ギルベルトつて……？」

俺が質問してすぐにフランシスは指をしまつて俺に頬笑みながら答えた。

「ルートのお兄さんだよ。」

（ルートって、お兄ちゃんいたんだ……。ん？お兄ちゃん？何か忘れてるような気がする……。）

「アルフレッドとギルベルトはアーサーの創つた幻だ。アーサーは、もともと俺たちのいる世界の人達からデータを取つてこの世界でもう一人同じ人を創つてる。だから一人は、アーサーの創つたこの世界から出られない。もとの世界に本物がいるからね。まあ、データをもとの人間に戻すことはできるけど……こっちの世界での記憶は失われてしまう。」

フランシスは厳しい顔をしながら話を進める。

「ああ、そういうえば。どうしてルートは怪我してまでアーサーに従つてたの？って質問だつたよね。」

俺は口をかたく結びながら首を縦に振つた。

「ルートはね。洞窟に行つてたの。」

フランシスはにこやかに答えたが、俺はいきなり洞窟といつ単語が出てきたので驚いた。

「どう・・くつ・・・・？」

「うん。その洞窟は、この世界ともとの世界をつなぐ役割をしているようなものなんだ。その洞窟をふさげば、俺たちはもとの世界に戻れなくなる。それが、アーサーの狙いなの。だから、ギルベルトをこの世界に創つた。」

「そんな！？」

俺は思わず席を立つてしまつた。するとフランシスさんも席を離れ、家の中をのんびりと歩き始めた。

「それでもあの子は、兄を連れて帰らうとしてる。だから、アーサーの言いなりになつてる。」

フランシスは歩を止め、俺の瞳をしつかり見つめてそう言つた。

「けれど、大切な人のためにすることが、その人を悲しませることになるなんて嫌だよ・・・！」

（ギルベルトつて橋の所であつた人だよね・・・？！とても、悲しそうな顔をしてた・・・！）

だから、みんなの名前を取り戻したい。ルートはこれ以上この世界にいちゃいけないんだ・・・！みんなで、帰らなきや・・・！



## ルートビギルベルト（後書き）

会話が多くて読みづらいですね～。スミマセン。前の話と間が空いてしまいましたし。年賀状制作に時間がかかってしまって。。。本当にいつもありがとうございます！

## イギリス（前書き）

暖炉の中から現れたのは異世界人のイギリスさん！「このハリー・ポタですか・・・。ニコニコ動画『フヨリとイタリの神隠し』小説化してみた」

## イギリス

ガチヤン

フランシスさんは家のドアを開け、もつ入つていよいよと黙つてロヴィーノとアルを家に入れた。アルはロヴィーノの背中ですやすやと眠つてゐる。疲れたのだろう。

「外に出させちゃつてごめんね。アルフレッドの事外に連れてつてくれてありがと。助かったよ。」

「じゃあ、席についてさつきの話の続きをもしようか。ロヴィーノ、アルの事ソファで寝かしておいで。」

アルをソファに寝かし終わるとロヴィーノは机にやつて來た。ロヴィーノはドアを挟んで二人の話を聞いていたらしく、俺たちがもう一度説明しなおさなくて大丈夫なようだ。アルは薔薇園で遊んだあとすぐ寝てしまつたので話は聞いていないこと。

「おい、フランシス。どうしてアーサーはもつ一つの世界をこじつたんだ? それに、アーサーは何者なんだ・・・?」

ロヴィーノは眉をひそめながらフランシスさんに尋ねた。

「そうだねえ・・・。こつから先の事は、俺じゃなくてイギリスに直接聞いた方が早いかも。」

「いき・・りす・・・?」

何やら聞いたことがあるような、でも何かは分からぬ不思議な感じのする名前だった。

「うん。ちょっと待つて。」

そう言つてフランシスさんは席を立ち、電話の置いてあるところへ歩いて行つた。

ジーッ、ジーッ

黒電話のダイヤルを回す音だけが静かな部屋に響く。

トウルルル・・トウルルル・・・

相手を呼び出している音がかすかに聞こえた。

ガチャ  
アリ

たつた二回しかコールしていしないのに受話器を取る音がした。もう電話がイギリスという人に通じたのだろうか。その瞬間、耳を劈くつぶやような声が聞こえた。

電話がある所からそこ離れているというのに、俺たちの所まで届くような大きな声だ。だんだん声が小さくなつていつたようで最後の方はよく聞き取れなかつた。

ガチャン。

フランシスさんは受話器を元の場所に置き、席に腰をかけると「もうすぐこっちに来るってさ。」と言いながら、俺たちが暖炉の方を向くようにフランシスさんの後ろにある暖炉を親指で指差した。

ぶおん！！

「フランシスさんが指を指したのと同時に暖炉に煙があがつた。暖炉に火は入っていなかつたのにいきなり煙が出てきたものだからびっくりして、俺とロヴィーノは目を皿のようにして暖炉を見つめた。だんだんと煙が消えていく。そこには・・・。

「アーカーごあ！！！うつああああ！！！たすけてええええ！！！」

۱۰

そう、アーサーがいたんだ。

「つるせえーばかあー！俺は「イ・ギ・リ・ス」だー！」



## イギリスト（後書き）

なんだかじゅうぶんしゃしてますね。（いつもだらり？）すいません。  
今回も読んでくださつてありがとうございます！

## フタツノ涙（前書き）

俺は嫌なヤツだ。全部俺と一緒にと思ってた。みんな、人それぞれ一緒に悲しんでくれる人がいて当たり前だと、思っていた。

俺は、気づいてなかつただけで。俺のそばにも、俺と一緒に悲しんでくれるヤツがいたんだ。

二〇一二動画「フェリとイタリの神隠し」→小説化してみた

## フタツノ涙

「じゃあイギリス、説明しておいてね。俺はちょっと薔薇園まで行つてくれる。」

そう言って、フランシスさんは部屋を出ていつてしまった。

「よし、邪魔者が消えた所でお前たちにアーサーの事を教えてやるう。」

イギリスはやけに威張りながら俺たちに説明を始めた。席に着いた途端さつきまで威張り散らしていた態度とは対照的な、何だか申し訳なさそうな態度になつた。

「・・・あいつは、アーサーは、もう一人の俺なんだ。正確に言うと俺の中の感情のひとつ、だな。」

イギリスは両肘を机の上に置いて顔の前で手を組み、そこに顔をうずめながら、少し震えた声でそう告げた。

「だからアーサーはお前にそっくりなのか・・・。でも、なんでアイツはお前の中から出ていつて別の世界を創つたんだ?別に、ずっとお前の中にいても・・・。」

「ずっと俺の中にはいられなかつた・・・!—アイツは、感情つて言つても、負の感情なんだ。寂しいとか、苦しいとか、嫌だ、みたいいなヤツだ。その感情が俺の中に入りきらなくなつて俺の中から出ていくしかなくなつたんだ。」

アーサーはロヴィーノの言葉を途中で遮り、自分の言葉を重ねた。  
（どうして人に相談しなかつたんだよ・・・—そのせいで・・・みんな・・!—）

バンッ!!

俺はテーブルを叩いて席を立つた。

「どうして・・・。君はどうしてそんなに感情を溜めこんだんだよ・・・?感情が遺志を持つてしまつまで、どうして放つておいたん

だよ・・・・・

俺は思わずイギリスの胸ぐらを掴んでしまった。その時のイギリスの顔は涙で濡れていて。俺にはすぐ分かった。この涙は「アタタカイ涙」じゃないつて。「ツメタイ涙」なんだつて。

「おい・・・！ フエリシアーノ！！」

ロヴィーノも席を立つて俺の事を止めようとした。だけど俺は、この手を離すわけにはいかない。

「・・・・・」

イギリスはその場にヘナヘナと座り込んだ。俺はイギリスの胸ぐらを掴んでいたての力を弱め、イギリスの動きに合わせて俺もしゃがみこんだ。するとイギリスは、今まで溜めこんでいたものを涙と一緒に流し出した。

「うつ、うつ・・・。だつ、て・・・！ 俺にはつ、悩みを打ち明けられる奴も、一緒に悲しんでくれる奴もつ、いないんだつ・・・！ お前みたいに、いつつも人に囮まれてる奴とは違うんだよおつ・・・！」

俺は、返す言葉を失った。思えば、俺の周りにはいつも人がいたような気がする。元の世界の時の記憶はよく思い出せなかつたが、それでも一人ではなかつたきがする。ひとりぼっちで寂しいなんて感情を、俺の心は感じとつたことなかつた。だから、そういう感情を持つている奴のことを、考えてなかつた。

ガチャン！！

紡ぐ言葉が見つからず、イギリスの苦しみを吐きだしている音のみが聞こえる部屋の沈黙を壊したのは、勢いよく開けられたドアの音だった。

薔薇園で青薔薇を積み終わり家中に入ろうとするとき、どなり声が聞こえたからドアの前で家の中に入るのをためらっていた。

家中に入るタイミングを見つけるために耳をドアに近付けて中の音を聞いていたら、イギリスの泣き声が聞こえたんだ。

「俺にはつ、悩みを打ち明けられる奴も、一緒に悲しんでくれる奴もつ、いないんだつ・・・！お前みたいに、いつも人に囲まれてる奴とは違うんだよおつ・・・！」

久しぶりに聞いたアイツの本気の泣き声を聞いて、胸が痛くなつた。知らなかつたんだ。アイツがそんな事思つてるなんて。いつも泣いていたから、それが普通なんだと思つてた。こんなに苦しんでるなんて、知らなかつた。

なんで氣づいてあげられなかつたんだろう。どうして、悩みを聞いてあげられなかつたんだろう。アーサーがこの世界を創つたのは、イギリスのせいじゃない。アイツの悩みに氣づいてあげられなかつた、俺のせいだ。

ガチヤン！－

「イギリスト・・・！－」

俺は自分で意識していないのに勝手にドアを開けてイギリスのもとへと駆け寄つていた。

「ごめんな・・・？」

俺は、イギリスのそばに寄るなりイギリスを強く抱きしめ、自分の気持ちを伝えた。「イツにもう、辛い思いをさせたくなかつた。今辛い思いをしているコイツの心を全て包みこんであげたかつた。そんな思いがつまつた『ごめん』の一言。

「ふら、んす・・・」

「辛い思いさせちゃつてごめんな・・・？」

俺がイギリスを抱きしめた瞬間イギリスの涙は止まつていたのだけれど、俺がそう言つと、また泣きだしてしまつた。

でも、よかつた。『イツの涙が「ツメタイ涙」じゃなくなつて。「アタカイ涙」になることができたから。もづ、大丈夫。本当にめんな、イギリス。

## フタツノ涙（後書き）

「」でずっと気にかかっていたことを言っています。この作品は友情設定です！もう一度言います。友情設定です！！・・・ハイ。そこんところよろしくお願ひします。今回の話も読んでくださつてありがとうございます！やこます！感想下さるととってもうれしいです。できるだけ早くお返しします！

## 眞実、心の聲（前書き）

何故だらう。その名前が、俺の心に靈をかけた。動画「フェリとイタリの神隠し」を小説化してみた。

— ハーパー

「・・・俺、・・・アーサーと話してくる・・・。」

俺は、俺と話さなくちゃならない。大切なことを。だから、早く行かなければならぬ。

「・・・イギリス。大丈夫なの・・?」

フランスは心配そうに俺の顔を覗き込んできた。まあ、止められても俺の考えは変わらないのだけれど。俺は口を固く結び、大きく、そしてゆっくりと、首を縦に動かした。

「うん。もう心は決まってるみたいだね。・・・行つておいで。イギリス。でも、どうやつてアーサーの所まで行くの?まだ、移動魔法使えるまで魔力回復してないんでしょ?」

(・・・あ、そうだ。すっかり忘れていた。電車に乗るには切符が必要だし、歩いていくのは時間がかかりすぎる・・・。)

「そう・・・だな・・・。」

ガタガタ・・・

俺がアーサーの所に行く方法を探していると、家の窓が音を立てた。「ん?なんだ、こんな時間に・・・。フランス! ドア、開けていいか?」

「ああ、いいよ~」

俺は、フランスの返事を確認して家のドアを開けた。

ぎこいい・・・

ドアを開ける音とともに、家の中に外の空気が心地よく流れ込んでくる音が聞こえた。そして、そこにいたのは、

「・・・でつけえ、黒鷲・・・?」

俺の目の前に、背中に人が乗れるのではないかという位大きな黒鷲が立っていたのだ。俺は、どうしてこんなに大きな鷲が俺の前にいるのか理解できずにドアを開けた格好のまま突っ立っていた。

「ルート！！」「

（・・・ルートって、ドイツの事、だよな・・・？）

家の中にいたイタリアが後ろから黒鷲のものだと思われる名前を呼びながら、ドアの前で立ち尽くす俺をどかしてイタリアが黒鷲の元へと駆け寄つていった。

「ルート！！もう大丈夫なの？」

黒鷲は静かに頷き、視線をイタリアから俺へと向ける。

そして俺の元へゆっくりと歩み寄つてくると、俺に背を向けて、まるでここに乗れとでも言つたのように背中を押し出してきた。

「もしかして・・・俺を連れてつくれんのか・・・？」

俺は黒鷲に尋ねたが、黒鷲は黙つたまま、さらには背中を近づけてくる。

（乗つていいんだよな・・・？）

「うつ・・・よつ・・・と・・・。」

位置が高くて乗るのが大変だつたけど頑張つて黒鷲の背中にまたがつた。

（あ、そういうえば、俺コイツに言つておかなきゃならねえ事が・・・。）

「あ・・・ちよつと待つてくれ。」

俺は今にも飛び立ちそうな黒鷲に声をかけ少しの間待つてもうつとにした。

（イギリスに誤った方がいいよね・・・。さつき酷いこと言つちや

つたし・・・。)

そう思つて、俺がイギリスの名前を呼んで謝ろうとした。

「フヨリシアーノ！ ちよつとこっち向け！！」

その時、丁度イギリスが俺の事を呼んだんだ。俺は地面に向かつている顔を、イギリスへと向けた。

「今、お前に渡さなきやいけないものがある。」

イギリスは巻物のように巻かれた紙を俺の手の平に押しつけた。俺に紙を渡してすぐ、ルートに「もう行つていいや。」と言つてアーサーの所へ飛び立とうとした。ルートはすぐに地面から足を離し、星の舞う空に向かつて飛んでいく。

(今、言わなくちゃ・・・！)

「ごめんね・・・。」「ありがとよ・・・。」

俺とイギリスの言葉は同時に口から紡ぎ出され、それぞれの心へと届いた。さつきまで心中でもやもやしてたものは俺の発した謝罪の言葉とともに消えてしまったのだろうか。空に舞う星がやけにきれいに見えた。

俺たちは空に向かつルートたちに手を振つて二人の事を見送つた。一人の姿が見えなくなつたので俺たちは一度家に戻ろうと家へ足先を向ける。家へ歩を進めながら、さつきイギリスに手渡された巻物を開いた。そこには、真実が綴られていた。たくさんの真実が。

? イタリア、ヴェネチアーノ・・・??

何故だらう。紙に記されたたくさんの名前の中で、その名前だけがひと際目立つて見えた。そしてその名前は、一度清々しくなつた俺の心に、再び靄もやをかけたんだ。



## 真実、心の聲（後書き）

「」まで読んでくださりありがとうございました。感想・評価の方  
よろしくお願ひします！小説の進歩の為に良い所、悪い所を教えて  
もらえると半端なく喜びます！感想などの返事はできるだけ早くし  
ますね！よろしくお願ひします！  
そして、こつもありがとうございます！

## 名前（前書き）

元の世界に帰るまでの条件は、あとひとつ  
動画「フヨリとイタリの神隠し」を小説化してみた。

— 111 —

## 名前

（・・・にしても、コイツ軽いな。下に落ちても気づかないでそのまま飛んでいいてしまいそうだ。）

「・・おい！ルート！」

そんな事を考えていると俺の背中に乗っているイギリスが俺に話しかけてきた。一度イギリスが深い呼吸をした音が聞こえた。

「・・あのさ、お前ホントは自分の名前忘れてないだろ。」

イギリスは体を少し前に倒して自分の顔を俺の顔の横へ近づける。

（・・・何故分かつたんだ？）

俺の考えている事が伝わるはずはないのに、イギリスは俺の考えに答えるように再び話し始める。

「お前がこの世界に来たとき、お前は自分の日記を持っていた。そこに他のヤツらの名前と、自分の名前が載っていたはずだ。だけどお前は知らないって嘘をついた。元の世界に帰るわけにはいかなかつたから。そしたら・・・でも、アイツはそれを望んでないぞ？」

分かつてる。分かつているんだ。そんな事。・・でも

!!

？イタリア・ヴェネチアーノ？？イタリア・ロマーノ？

その一つの名前が俺の心に纏もやをかけ、俺の足を止めた。

「ん・・?どうした？フェリシアーノ。」

家に入ろうとした時に俺が立ち止まっている事に気付いたのだろう。ロヴィーノ・・いや。ロマーノは俺の方へ向かってくる。

「早く家に入・・・」

そう言いながら俺の持っている紙を覗き込んだロマーノは俺と同じように動きを止めた。

ザツ、ザツ・・・

紙を見て固まる俺たちの前にフランス兄ちゃんがやつて來た。腕にはスヤスヤと寝息を立てるアルフレッド。

「・・・これで、元の世界に戻れる為の条件が残りひとつになつたね・・・よし、じゃあ、準備も整つたし。行こうか。アーサーの・・イギリスの所まで・・・。」

そう言って俺たちに笑顔を向けると、フランス兄ちゃんは俺にアルを抱かせてから地面に3人が立てるほどの大さの魔法陣を木の棒で書き始めた。

2分ほどたつただろうか。魔法陣を書き終わるとフランス兄ちゃんは俺たちの背中を押し、魔法陣の上に立たせた。

「・・・よし。二人とも、深呼吸して!」

フランス兄ちゃんは俺たちが息を吸い始めたのを確認すると、「いつくよ〜!!」と言つて呪文を唱え始める。

「N o u s e - q u i v i t a . D i e u - m o n h a b  
i l l i t e e a .」

呪文が唱え始められると同時に魔法陣の線から強い光が発される。強い光に、俺は思わず目を閉じた。

眼を開けた時には目の前にさつきまでいた場所の景色はなかつた。目の前には大きな建物があり、建物の方には眉と書かれた旗が掲げられている。

「ここって・・・麻・・・屋・・・?」

さつきまで星がまつていた空は、いつの間にか澄んだ空色へと変わっていた。

名前（後書き）

なんかギクシャク？してますね～。テンポ悪いです。いつせつたら  
良くなるんじやない？みたいなアドバイス隨時受付中です！ 今回  
の話も読んでくださつてありがとうございました！

## 約束（前書き）

「『ねん』の言葉よりも、「ありがとう」の言葉の方が、君にたくさん  
さん書いておきたいから。――。「『』動画「フリリ」とイタ  
リの神隱し」～小説化してみた～

「行こ」うか。」

フランス兄ちゃんはそう言ひて麻屋へと入つてこく。

「・・・え、つ！―正面からかよ――」

「俺、お客様だもへん！―しばらべいぢゅうでも食べてよつか～？」

フランス兄ちゃん・・・相変わらず田立ちたがり屋さんです・・・

。

元の世界に戻してやつてくれ……！」

俺がそう言つと、アーサーは途端にさつきまでの表情を崩し、俺を睨んできた。

「なんだよ……お前だつて……！ 独りでさみしかつたんじゃないのかよ？ だから……！ 俺は……」

アーサーの声は言葉を重ねると共に小さくなつていき、最後には涙声になつてしまつた。

「どうして……！ 俺がやつした事はこつも誰かに邪魔されて……こつも既に既定される……！ どうして……！ なんだよつ……！ …！」

そう言いながらアーサーは床に座り込んでしまつた。

（俺の……せいだよな……。）今まで溜めこんじました、俺のせいだ……。

本当にすまないと思つた。自分に負担をかけ、そのせいで自分だけではなく、他の奴にも迷惑をかけた。本当に悪いのはアーサーじゃない。負の感情が悪いんじゃない。抑えきれなくなるまでその感情を溜めてしまつた俺の責任だ。

「ごめんな。アーサー。

俺は少し離れた所にいるアーサーの前まで静かに歩を進め、静かに腰を下ろした。そして、俺は優しくアーサーを抱きしめる。

「もう、俺は大丈夫だから。もう溜めこまない。約束だ。もう、お前にこんなことさせない。」

アーサーはこけらに顔を見せずに、俺が耳で聞くコイツの最後の言葉を発した。

「約束だな？」

「ああ、約束だ。」

俺がそう言葉を紡いだ瞬間、俺の腕に触っていたものが消えていくのを感じた。

「 つ  
。」

ああ、言葉を直す。『「めん」じゃない。  
ありがとう。アーサー。

## 約束（後書き）

同じ言葉が何度も出てきましたね・・・。誤字・脱字・とにかくおかしい、などはジャカジヤカ教えてください。あなたの清きい意見を！！

・・・。23話も見てくださいありがとうございました。最後まで見てやつてくださいね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0754z/>

---

フェリとイタリの神隠し

2011年12月27日22時48分発行